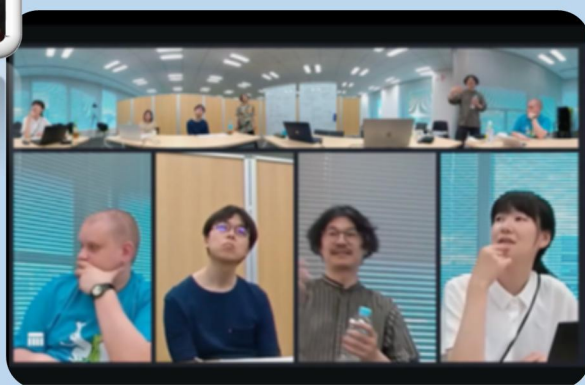


人文知コミュニケーター 活動ノート 2024



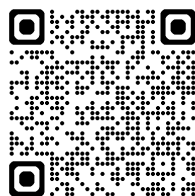
人文知コミュニケーターとは？

人文知コミュニケーターとは、展示など多様な発信媒体、機会を活用して人間文化研究の成果をわかりやすく社会に伝えるとともに、研究に対する社会からの要望、反響を吸い上げ、研究現場に還元するスキルを有した研究者のことです。人間文化研究機構では、社会と研究を「つなぐ人」として、「人文知コミュニケーター」の組織的育成を行っています。

人文知コミュニケーターは、人間文化研究機構の各機関に配置され、学術資源情報の発信、広報、社会連携活動等を推進すると同時に、自身の研究も発展、深化させるよう取り組んでいます。配置機関の受入教員から指導や助言を受けながら活動しており、人文知コミュニケーター間の自発的な研究会、独自の発信等も活発に行われています。



<https://www.nihu.jp/ja/training/lac.html>



人文知コミュニケーターの紹介



氏 名:アルト・ヨアヒム (ALT Joachim)

所属機関:国立歴史民俗博物館

専門分野:地域研究(日本学)、メディア研究、文化理論

就任年月:2022 年 10 月

researchmap:https://researchmap.jp/joachim_alt

私達は何に基づいてアイデンティティーを創りますか?例えば「〇国の国民は〇〇である」のような考え方は主に 18 世紀に生まれて、現代社会に大きく影響を与えています。そして、多様なメディアが国民のイメージを複製し、それらのイメージを私達のアイデンティティーの一部として定着させます。私はそこで、「平和国家日本」と日本アニメに描かれた戦争を調査して、アニメおよび日本の「戦争記憶」についての理解を深めていきたいです。



氏 名:河田 翔子(かわた しょうこ)

所属機関:国文学研究資料館

専門分野:中世説話文学、特に古記録・古注釈にみえる説話的要素の研究

就任年月:2024 年 6 月

researchmap:https://researchmap.jp/kawata_shoko

私は中世説話文学を専門としています。「説話」とはく神話・伝説等の口承・書承で伝えられてきた様々な話の総称で、人々が長い歴史の中で大切に語り伝え・書き伝えてきたものです。説話には、それを伝えてきた当時の人々の想いや思想が反映されています。つまり、説話を読み解くことで、何百年も昔の人と心をかよわすことができるのです。豊かな《和書》の世界の魅力を伝え、時代やジャンルを超えて、人と人をつなぐことができるような活動をしていきたいです。



氏 名:横山 晶子(よこやま あきこ)

所属機関:国立国語研究所

専門分野:言語学、方言学、社会学、地域研究(琉球)

就任年月:2023 年 7 月

researchmap:<https://researchmap.jp/akikoyokoyama>

私は「今何もしなければ、近い将来話者がいなくなってしまう」危機言語の文法記述・記録・継承研究をしています。危機言語の研究は、その学問的な価値はもちろんですが、「成果をいかに地域社会と共有していくか?」「どのように地域の方々と協働できるのか」を意識することの多い分野です。一方的な研究・成果還元ではなく、社会と研究者が双方向にコミュニケーションを取りながら、お互いにとってより意義ある研究、広がりのある研究を模索していきたいと考えています。



氏 名:駒居 幸(こまい さち)

所属機関:国際日本文化研究センター

専門分野:カルチュラル・スタディーズ、日本近現代文学

就任年月:2023 年 7 月

researchmap:<https://researchmap.jp/komai-sachi>

日本の現代文学について、女性と労働の表象に注目しながら研究を進めてきました。今の研究を始めた背景には、私自身が民間企業や大学で働く中で、文学作品を読むことが "「社会人」にとっての〈社会〉ってなんだ?" と自分と社会の関係を考え直すきっかけになったという経験があります。文学作品を読みながら、自分が生きて、働いて、日々を過ごしているこの社会についても読み解く.....そんな営みを広く生み出せるような活動をしていきたいと思っています。



氏 名:澤崎 賢一(さわざき けんいち)

所属機関:総合地球環境学研究所

専門分野:芸術実践論(キーワード:現代美術、ドキュメンタリー映画、超学際、環境人文学、イスラームなど)

就任年月:2023 年 7 月

researchmap:<https://researchmap.jp/kenichi-sawazaki>

私にとって人文知とは、社会と研究の現場をつなげると共に、私たちが「この世界でどのように生きていくべきか」をさまざまなバックグラウンドの人たちと共に考え、実践していくことです。

私は《映像》を活用して、この「問い」について考えるための場を創出するために、学術研究や芸術・社会実践など特定の領域に縛られず、かつ両者を関係づけながら、それらを並行して実践するさまざまな学際的なプロジェクトに取り組んでいます。



氏 名:工藤 さくら(くどう さくら)

所属機関:国立民族学博物館

専門分野:宗教人類学、ネパール研究、食文化

就任年月:2024 年 2 月

researchmap:https://researchmap.jp/_sakura-01

私の専門は宗教人類学で、ネパールで人びとの暮らしに共に関わりながらその意味や時代の変化について記録を続けています。みんぱくには創設以来、世界中のさまざまなモノや人びとの暮らしに関わる情報が集められてきました。時代を経てそれらはデジタルアーカイブとして情報化され、日本だけでなく世界中の教育機関や研究者の研究活動に活用されています。モノをつうじて《世界》で起こっている多様な動きにつながっていく、博物館機能をもつ研究機関としてその発信に貢献していきたいです。

人間文化研究創発センターにおける主な活動

社会と研究をつなぐ人文知コミュニケーションを実践するさまざまな活動を行っています。

筑波大学・国立科学博物館との連携講座

筑波大学・国立科学博物館と共同で開発した授業科目「人文知コミュニケーション：人文社会科学と自然科学の壁を超える」を実施しました。

人文知コミュニケーターは、授業の企画段階から積極的に関わるとともに、講師を務めました。



国立歴史民俗博物館実地研修



国立歴史民俗博物館において、博物館の機能や役割、博物館展示の在り方などについて実際の展示を踏まえて討論する実地研修を実施しました。

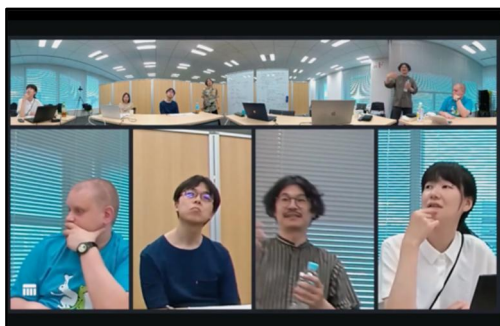
ワークショップ 「地域社会と人文知コミュニケーション」

地域社会における人文知の在り方や、人文系研究者・研究機関への期待について知見を共有し、人文知コミュニケーターの活動を機関の外につなげ、広げていく方法を考えるワークショップを開催しました。



ワークショップ 「学際的な共同研究の可能性を探る」

異分野間の協働に向けてのコミュニケーションのあり方を考察するためのワークショップ「学際的な共同研究の可能性を探る」を開催しました。



ウェブコラム「くらしに人文知」

「くらしに人文知」は、人文知コミュニケーターが発信するウェブコラムです。

身近な話題からちょっと難しい話まで、人文知コミュニケーターならではの視点で記事を発信しています。



- Vol.9 双方向のコミュニケーションから生まれる相互作用
(工藤 さくら 国立民族学博物館)
<https://www.nihu.jp/ja/publication/kurashi/vol.009.html>
- Vol.10 DH 若手の会 発表報告
(駒居 幸 国際日本文化研究センター)
<https://www.nihu.jp/ja/publication/kurashi/vol.010.html>
- Vol.11 戦争のトラウマの処理から生まれた映画史
(アルト・ヨアヒム 国立歴史民俗博物館)
<https://www.nihu.jp/ja/publication/kurashi/vol.011.html>
- Vol.12 「分かりやすい図」を目指して生まれるコミュニケーション
(駒居 幸 国際日本文化研究センター)
<https://www.nihu.jp/ja/publication/kurashi/vol.012.html>
- Vol.13 座標を広げる、座標が分かる
(横山 晶子 国立国語研究所)
<https://www.nihu.jp/ja/publication/kurashi/vol.013.html>

人文知コミュニケーション研究会

人文知コミュニケーションについての理解を深め、また、6 機関に配置された人文知コミュニケーター間の連携を図るため、人文知コミュニケーターによる研究会を毎月1回開催しています。各コミュニケーターが実践する人文知コミュニケーションの事例やそれぞれの研究活動についての情報共有・意見交換を通して相互理解にも繋げています。

それぞれの人文知コミュニケーターの主な活動

国立歴史民俗博物館 アルト・ヨアヒム (ALT Joachim)

【各機関における主な活動】

- 機関誌『REKIHAKU』編集委員会にオブザーバーとして参加しました。
- 特集展示「スクワイア家の記憶—ある英国人技術者の遺品から—」解説会における登壇者の日英通訳を務めました。
- 機関誌『REKIHAKU』の投稿記事「日本と世界をつなぐポップカルチャーの中の日本史」を執筆しました。

【この1年を振り返って】

2022年の秋に人文知コミュニケーターとして着任したので、2024年度に入るとわずかな3年間の任期の終わりがもう目の前のことになっていました。そのため、いち早く就職活動に力を注いできました。しかし、就職活動とは単に教員公募に応募するということではなく、自分の応募が無数の応募の中から目立つための準備をすることです。この考えのとおり、採用で一つの大きな要素となっており、人文知コミュニケーターとして着任してからも力を入れてきた若年層への教育の経験を自分の長所として説明するようにしました。2024年度は知り合いの大学教員からにサバティカル代理まで依頼され、前期には三つの大学で週5コマの授業を兼業することになり忙しかったのですが、充実した気持ちもありました。そして後ほど、2025年度からの就職が決まりました。正しい道を選んだとしか思えません。

しかし一方、就職活動がうまくいったため、歴博での残りの時間が短くなってしまって、胸にはちょっとした寂しさも生まれました。歴博という素敵な場所や人々から離れることは空しい気持ちにもなりました。

2024年度は研究の面でも、以前に共著した論文集の合評会、出身国のドイツでのシンポジウムや渋谷スクランブルスクエアでの公開講演ができて、自分の研究は人に届いているだけではなく、評価されているという確信を持つことができました。

退職後にも、人文知コミュニケーターの活動に関わりたいと思います。「人文知コミュニケーション・シンポジウム」などを企画することを検討しています。

【私の一押し】

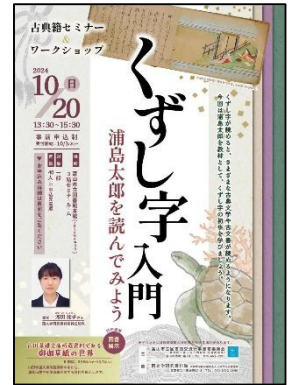
2024年7月23日から10月6日まで、歴博では「スクワイア家の記憶—ある英国人技術者の遺品から—」という特集展示が開かれました。この展示はイギリスのダラム大学東洋博物館の協力のもと開催され、開始にあたっては和英両方を使った解説会が行われました。私はここで、和声の通訳を担当しました。2022年の着任直後、歴博で初めての大きな仕事はダラム大学の訪問団の通訳だったため、縁を感じる業務となりました。

国立歴史民俗博物館 特集展示
「スクワイア家の記憶 —ある英国人技術者の遺品から—」ちらし



【各機関における主な活動】

- 古典籍セミナー&ワークショップ「くずし字入門—浦島太郎を読んでみよう—」(於富山市立図書館)の講師を務めました。
- 「和書のさまざま」展、「松野文庫の贈りもの」展、「枕草子と春曙文庫—田中重太郎旧蔵書資料を中心に」展(於国文研展示室)などにおいて、計14回のギャラリートークを担当しました。
- 「第17回 日本古典文学学術賞」授賞式及び令和6年度(2024年度)「古典の日」講演会の司会を担当しました。
- 『国文研ニュース No.66』に記事を執筆しました。
- 「源氏物語の新世界—明け暮れ書き読みいとなみおはす—」展(於たましん美術館)において、解題執筆(12点)やギャラリートークを担当しました。また、関連トークイベント&ワークショップ「源氏とあそぶ。源氏をまとう。」の司会も務めました。



くずし字入門—浦島太郎を読んでみよう— ちらし

【この1年を振り返って】

人文知コミュニケーション研究会での口頭発表や、ワークショップ「学際的な共同研究の可能性を探る」(於京橋エドグラン)の対話と動画撮影などをとおして、く自分にとっての人文知コミュニケーションとは何か?を考えることができた1年でした。

配属機関である国文研では、主に展示やギャラリートークなどを担当しました。この経験から、着任当初と比べて、一般の方々(来館者)に対して最新の研究成果を分かりやすく説明できるようになりました。特に、相手の年齢や知識量(たとえば中学生か大学院生か社会人かなど)に合わせた説明が出来るようになったことは、大きな成長であったと感じます。

一方で、ギャラリートークやくずし字講座など一般の方々と「対話」をする機会は増えましたが、その成果を「執筆」する機会が少なかったように感じます。着任初年度ということもありますが、様々な経験や知識をインプットすることに重点を置きすぎて、その成果のアウトプットが疎かになってしまったと反省しています。次年度は、得た知識を何らかの形で公開・公表し、多くの方々からご批正を賜り、自身の研究もさらに深化・発展させていきたいと思っています。

【私の一押し】

「源氏物語の新世界—明け暮れ書き読みいとなみおはす—」展
(会期:2025年1月11日~3月16日、於たましん美術館)

着任後はじめて、深く関わった展示でした。また、前任の人文知コミュニケーター(現・神奈川大学助教/朶汐里先生)が企画・資料選定などを担当されていたため、く前任から引き継いだ大切な展示くということで印象に残っています。

12点担当した解題執筆では、一般の方に分かりやすく、かつ当該資料の貴重さを分かりやすく伝えるように努力しました。ギャラリートークも計4回担当し、ご高齢者から小中学生まで幅広い年代の方々へ『源氏物語』の魅力をお伝えできたことは貴重な経験でした。



源氏物語の新世界 ちらし

【各機関における主な活動】

- NINJAL フォーラム「子どもたちが大人になったときにも、島のことが聞こえる世界を残すために」を共催しました。
- ウェブサイト「ことばのミュージアム」において、16 記事(井川方言、出雲方言、宮古島池間方言)を公開しました。
- オープンハウス「ニホンゴ探検」における「研究者ミニ講義」を担当しました。
- 静岡県井川地区の合同調査を経て『井川方言語彙集』を編集しました。(2025/7 刊行)
- 『方言録音資料』『方言談話資料』の音声ラベルデータ(text grid) 公開に向けたデータ整備を進めました。
- 『ことばの波止場』編集委員として、特集記事「方言 AI」を作成しました。



NINJAL フォーラムの様子

【この1年を振り返って】

今年度は、(1)機構内での人文知コミュニケーター活動、(2)機関内での広報業務・社会共創プロジェクト・危機言語プロジェクト、(3)個人研究の3つの柱で幅広く活動を行いました。

(1)人文知コミュニケーターとしては、ボン大学における国際シンポジウムでの発表や、研修への参加のほか、他の人文知コミュニケーターの皆さんと異分野間の協働ワークショップを実施し、国際学会での共同発表を進めるなどの活動が広がりました。(2) 機関では、「NINJAL フォーラム」の共催、国語研オープンハウスでの講演、「ことばのミュージアム」の記事公開などを通じて、研究成果を一般向けに公表する仕事に多く携わりました。また、合同調査の結果をまとめた語彙集の発行や、国語研の過去のデータ『方言談話資料』『方言談話資料』の整備も進めました。(3) 個人の研究では、今年度から代表者を務める基盤研究(B)のプロジェクトがスタートしたほか、沖縄県立博物館で「しまくとぅば シンポジウム」の共催、英語著作の執筆、2 件の論文・チャプターの執筆、9 件の発表(うち国際発表 7 件)などを行いました。

【私の一押し】

今年度から基盤研究(B)において、危機言語の New Speaker (新しい話者)を育成する「マスター・アプレンティス」プロジェクトを開始しました。本プロジェクトでは、ことばを学びたい人(アプレンティス)と、話せる人(マスター)がペアとなり、日常生活のさまざまな活動をできるだけその言語のみを用いて行うことで習得を目指します。1 年目は 11 名のアプレンティスが参加し、全員の文法・リスニング・スピーキング能力に有意な向上が見られました。さらに、沖永良部島上平川方言の「方言 AI」を開発し、小学校の方言授業で活用されるなど、言語データの実践的活用を進めています。



マスター・アプレンティスの様子。マスター(しまむに話者)から、植物を使ったかご作りを学ぶ。

【各機関における主な活動】

日文研の社会連携事業の中で、京都府・京都市の小中学校での出前授業、市民向けイベントの司会・運営、日文研の広報媒体である NICHIBUNKEN NEWSLETTER の編集などを担当しました。所属部署である総合情報発信室が日文研 IR 室と共催した IR シンポジウムでは、地球研人文知コミュニケーターの澤崎さんとともに「研究評価と研究発信の接点を探る」ことを目的とした事例紹介を行いました。



京都市立桂坂小学校の探検授業にて、日文研のデータベースからクイズを出題

【この1年を振り返って】

「日文研を紹介する」機会が多い一年でした。出前授業、RA 協議会、人間文化研究機構の職員研修、ボン大学での表敬訪問 など。小学生から大人、日本から海外まで、様々な場所で、「日文研って何？」を問われた一年でした。どう紹介すれば興味を持ってもらえるだろう？ と試行錯誤を重ねることで、日文研への理解が深まっていったように思います。印象に残っているのは近隣の中学校に通う生徒から受けた「山陰道を通った歴史的偉人を教えてください」という質問です。現代文学が研究対象の私にとっては専門外の質問だったので、日文研の先生に相談しながら回答することになりました。質問から「大枝山にある日文研の先生なら知っているんじゃないか」という期待が感じられて地域とのつながりを実感するとともに、人文知コミュニケーターは自分の専門分野だけに留まっていたは務まらないということが身に沁みた瞬間でもありました。

研究という側面では、着任以来、人文知コミュニケーターらしく、境界横断的に自分の文学・文化研究を発展させたいと思い、機構本部 DH 推進室が実施する研修等を通じて、デジタル・ヒューマニティーズの手法や発想を学んできました。結果的に、今年度末より、研究協力者を得て、文学に関わる研究データの整理・公開のための新しいプロジェクトを始めることができました。実際に動き出すのはこれからですが、NIHU の日文研の人文知コミュニケーターとして着任したからこそ始められた研究だと思っており、大切に進めていくつもりです。

【私の一押し】

「のぞいてみよう日本研究～研究者とわくわくトーク」(企画・運営を担当)

11月2日に実施された日文研一般公開にて、日文研の研究を身近に感じてもらうことを目的として、ポスター&トークイベントを企画しました。日文研の研究者がポスター形式で自分の研究を紹介し、来場者はポスターの前で本人に直接質問ができるというイベントです。人文系の研究者にはポスター制作に慣れていない方も多いのですが、市民と研究者が、双方向的にコミュニケーションが取れる場を作りたいという思いがあり、テンプレートを作成するなどフォロー体制を整えながら実施しました。客員教授、助教、外国人研究員、大学院生など、ベテランから若手まで、様々なポジションの研究者に発表をお願いし、当日は時間いっぱいまで質問が終わらない盛況となりました。2025年度の一般公開にもよりパワーアップした企画として引き継がれる予定です。



「研究者とわくわくトーク」の様子

【各機関における主な活動】

- 地球研で開催された RIHN-KLASICA 国際ワークショップ“Science x Art: Exploring New Creative Relationship” (2025 年 2 月)に登壇し、学際的なプロジェクトにおける映像の活用方法の可能性について事例紹介を行った。
- 地球研広報室との共催で、機構内部の研究者向けの映像制作ワークショップ「研究活動・情報発信での映像メディア活用ワークショップ」を開催した(2024 年 7 月)。
- 金沢 21 世紀美術館で開催された展覧会《すべてのものとダンスを踊って―共感のエコロジー》(2024 年 11 月-2025 年 3 月)に関連して、プロジェクト「アニメ・レイヴ存在の交差点で踊る」に参加し、地球研 LINKAGE プロジェクトとコラボレーションを行った映像作品を発表した。また、関連イベント「地球研 DAYS」で、研究者とアーティストのクロストーク「映像作家×水文学者:みているもののちがいがい」に登壇した。



RIHN-KLASICA
国際ワークショップ ちらし

【この1年を振り返って】

2024 年度は、人文機構の人文知コミュニケーター、地球研の社会共創コミュニケーション事業、個人研究、これら3つをオーバーラップさせながら幅広く活動を行い、自分自身の研究成果を活かした社会とのコミュニケーション事業を多数、計画・実践してきた。具体的には、まず人間文化研究機構若手研究者海外派遣プログラムのサポートを受けて、アメリカのワシントン D.C.に約 1 ヶ月間(2024 年 8-9 月)滞在し、米国 KLASICA の研究者との共同研究を発展させた。研究会&ワークショップ「参加型研究におけるナラティブ表現の可能性」(京橋エドグラン、東京、2024 年 11 月)を主催、日文研 IR シンポジウム「人文科学・社会科学における評価と応用を考えて」(日文研、京都、2024 年 12 月)で発表、展覧会《語りかける庭》(有斐斎弘道館、京都、2025 年 2 月)を企画・実施、KLASICA メンバーとの共著論文執筆(査読中)、ほか映像作品上映やトークイベントなど多数。



展覧会「語りかける庭」

【私の一押し】

人文知コミュニケーターらによる共同研究プロジェクト「イマジナリー・ダイアログ:映像・AI・芸術による参加型「問い」創出の学際的実践」(代表:澤崎)を、2025 年 4 月から発足させ、関連イベントとして、地球研×九州大ワークショップ「アートとリサーチを横断する表現者たちによる共創の可能性」(FabCafe Kyoto、京都、2025 年 7 月)、人文機構ワークショップ「異分野間で構想する共同研究の可能性」(FabCafe Tokyo、東京、2025 年 8 月)を企画している。



人文機構ワークショップ「異分野間で構
想する共同研究の可能性」

【各機関における主な活動】

- 博物館社会連携事業検討ワーキングに参加し、「みんぱく×大学生」プロジェクトの参与調査、研究紹介、貸出用学習キット「みんぱく」の使用事例の現地調査などを行った。
- 一人乗り自動運転モビリティ(WHILL)に付帯する音声ガイドの原稿作成を担当した。本館展示場 C ブロック(朝鮮半島の文化、中国地域の文化、アイヌの文化)の音声ガイド用原稿の作成と校正作業などを行い、声優を起用した録音にも参加した。また、次年度に向け、A・B ブロックの音声ガイド作成について打ち合わせを行った。
- 大学生・大学院生・大学教員向けに民博文化資源の複合的利活用を促すブックレット『みんぱくのディープなトリセツ』の原稿の作成に取り組んだ。冊子版ブックレットの発行、デジタルブックレットを公開した。



『みんぱくのディープなトリセツ』

<https://www.minpaku.ac.jp/assets/pages/teacher/school/deep/db/index.html?pNo=1>

- 教育旅行専門誌『月刊 教育旅行』への記事投稿、博物館と学生をテーマにした研究集会で民博の社会連携活動や開発物についての紹介を行うなど、情報発信した。
- 『月刊 みんぱく』の「だって調査だもの」シリーズで自身のフィールドノートを紹介した。
- エ藤さくら(2025)「日本にしながら世界旅行～文化の“厚い”記述を探究する～」『月刊 教育旅行』73(1):12-13 日本修学旅行協会
- エ藤さくら(2025)「おなかと背中がくっつきながら」『月刊 みんぱく』49(3):18-19 国立民族学博物館

【この1年を振り返って】

人文知コミュニケーターの業務をとおして研究者としての幅が広がったと感じている。しかし、機構・機関・個人研究それぞれ3割の-effortで活動する必要があったが、役割を使い分けることには苦勞が絶えず、また、組織環境に慣れるだけで時間を要したため、バランスよく活動できたとは言い難い。また、着任直後に年度をまたぎ、機関の事業計画に合わせてマインドセットを変えなければならず、結果的に、機関業務にかなりの時間を費やしてしまったことが反省点である。次年度は、機構・機関・個人研究それぞれに予定している事業が多くなるうえ、海外での調査や国際学会の発表などもあるため、effortや活動のバランスについては十分に注意してすすめていきたい。

【私の一押し】

今年度、最も力を入れたのが『みんぱくのディープなトリセツ』の制作だったので一押ししたい。対象者が大学生以上のマニュアルはどうしても文字情報が多く、説明的になることが多い。本書のこだわりは、極力、文字情報を減らしてビジュアルで説明している点だ。「来館する／しない」「場面・時系列」「目的・課題」ごとに民博のさまざまな文化資源コンテンツを組み合わせた利用を、ひと目で可視化できるよう工夫した。さらに、デジタルブック版では、ワンクリックでデータベースやアーカイブズのサイトに飛ぶことができる。この制作中、機関内でも部署同士の交流が生まれ、それだけでも意義がある活動だったと感じる。



大学共同利用機関法人人間文化研究機構

〒105-0001 東京都港区虎ノ門 4-3-13

ヒューリック神谷町ビル 2F

TEL:03-6402-9200(代表)



国立歴史民俗博物館

〒285-8502 千葉県佐倉市城内町 117

TEL:043-486-0123(代表)



国文学研究資料館

〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3

TEL:050-5533-2900(代表)



国立国語研究所

〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2

TEL:0570-08-8595(代表)



国際日本文化研究センター

〒610-1192 京都府京都市西京区御陵大枝山町 3-2

TEL:075-335-2222(代表)



総合地球環境学研究所

〒603-8047 京都府京都市北区上賀茂本山 457-4

TEL:075-707-2100(代表)



国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1

TEL:06-6876-2151(代表)

人文知コミュニケーター 活動ノート 2024

2025 年 10 月 発行

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 人間文化研究創発センター

TEL:03-6402-9200(代表) <https://www.nihu.jp/>